

雌猫ミーと私

——渡辺 利夫

わが家の猫は、東日本大震災の年の5月に大田区の「地域猫ボランティアセンター」から、もらい受けた雌のミーである。

りして面白そうなものがあれば飛びつきじゃれて、いつの間にかまた眠りこんでいる。場所はどこでもいい。こちらが抱っこして可



ミーの誕生日を私もは3月11日と勝手に決めている。だから4歳と少しだ。掌(てのひら)に乗ってしまうような子猫が日に日に育っていくのを見るのは、何とも楽しかった。ひたすら眠りこけ、目を覚ますと餌を食べ水をペチャペチャ飲んで毛繕いをし、マンシヨンの部屋の中を二回

愛がってやろうとしても、自分にその気がなければスリと逃げてしまふ。かと思ふと机上の書類をかきませたり、パソコンのキーボードの上を平然と歩き回る。

捨て子だったのだから、ボランティアでお世話になるまでに受けたトラウマ(心的外傷)もあるのではないかと想像してみるが、そんなこともなさそうだ。人間さまのように生きる意味などというバカなことは絶対に考えない。明日のことを患する無駄もない。まさに「Day by Day」である。

私も後期高齢者。今日がよければそれでよし”の心境に近づきたいと努めて考えるが、何そんなに難しいことでもあるまい。わが家のヒロイン・ミーの生き方に沿うていければいいだけのことだ。
(拓殖大学総長)

緑陰テーマ随想 ヒーロー・ヒロイン